

金子兜太著

わが戦後俳句史



岩波新書

322



金子兜太著

わが戦後俳句史

金子兜太

1919年埼玉県に生まれる
俳人。俳誌『海程』主宰

わが戦後俳句史

岩波新書(黄版) 322

1985年12月20日 第1刷発行 ©

定価 480 円

著 者 かね 金 こ 子 とう 兜 た 太

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

序章 トラック島にて 1

八月十五日の朝焼け (2)

楸邨と草田男と (8)

「船酔い」のあと (16)

一章 最初の冬 21

帰還 (22)

秩父にて (26)

堀徹のこと (31)

焼跡の街へ (39)

原子公平のこと (44)

樺のある家 (50)

草田男の「手紙」(57)

秩父谷の俳人たち(65)

句会の雰囲気(72)

二章 三年間(一) 77

復職(78)

二月一日の日本銀行(83)

分裂のとき(89)

小さなクーデター(97)

浦和への来訪者(103)

三章 三年間(二) 111

私小説と俳句(112)

歌俳への風当り(121)

俳壇の人間存在(126)

俳句のリアリズム(132)

詩と詩でないものの間 (139)

転機への予感 (147)

レッド・パージ (156)

四章 三都十年 167

福島にて (168)

前衛の息吹——神戸にて (一) (179)

俳句と社会性——神戸にて (二) (190)

朝はじまる——神戸にて (三) (198)

長崎にて (207)

東京へ (218)

あとがき 221

略年譜 (225)

引用自句索引 (229)

カッ ト 中 神 潔

序章

トラツク島にて



八月十五日の朝焼け

まずはじめに、「わが戦後俳句史」と、あくまでも「わが」というところに執着してゆきたい。たくさんの資料にあたり、考証もきちんとおこなうという戦後俳句史なら、ほかにいくらでも立派にやれる方がおられるし、わたしの任ではないとおもうのです。あくまでも自分に執してゆきたい。このことを最初に申し上げておきます。

次に、戦後俳句史とか戦後文学史という場合、その最初を終戦直後から始めるというのはいかにも形式的です。理想としては戦時中、さかのぼれば十五年戦争のはじまりのあたり、昭和六（一九三二）年ごろから始めるのが望ましいとおもうのですが、それについてはまた別のテーマ、わたし自身の「青年期の俳句往来」というような形で考えてみたい。ですからここでは、昭和二十年、わたしがミクロネシアのトラック島で終戦を迎えた、そのあたりから始めます。その終戦のとき、トラック島で作った句で、いまでもはっきり記憶に残っているのが三つあります。

その日、天皇の詔勅しやうちよくが今日あるからということ、トラック環礁かんしょうは秋島の各隊士官は、山頂

にあった警備隊に集合させられました。

しかし、海軍施設部の連中がこっそり聞いていたメルボルン放送で、わたしはもう前日には日本の敗戦を知っていました。

翌日が八月十五日。その朝起きてすぐできた句が、

椰子^{やし}の丘朝焼しるき日日なりき

という句です。そして、山頂の警備隊からもどり、みんなに敗戦の事実を告げて、その晩はささやかに椰子酒を酌^くみかわしました。そのとき、なんというか、大きな安堵^{あんど}感とともに、どうしようもない喪失感を同時に味わって、その二つのいりまじった気持の中で作った句が、

スコールの雲かの星を隠せしまま

その翌日、サンゴ環礁の彼方にわき出る積乱雲をながめながら、

海に青雲^{あおぐも}生き死に言わず生きんとのみ

この三つの句がいまも記憶に残っているのです。

とくに最初にできた「椰子の丘」の句は、ふっと気づいてみると、加藤楸邨^{しゅうそん}の句で、

屋上に見し朝焼のながからず

楸邨

この句のもじりだとわかったのです。楸邨第一句集『寒雷』の句で、時期は昭和十二、三年ごろ。

なんでこの「屋上に見し朝焼のながからず」が、いま自分の「椰子の丘朝焼しるき日日なりき」になったのだろうか。やはりこの句が読んだときからずっと記憶の底に残っていて、このときにふっとよみがえったのだ。そう感じたのです。

では、なぜ記憶に残っていたのか。これはその間の状況を説明しないと、私のいいたいことがはっきりしません。

昭和十二年、三十二歳の楸邨は、粕壁（現在は春日部）の中学教師をしていましたが、水原秋桜子あきしのすすめで上京し、東京文理科大学に入学します。それまで代用教員だったのが、三十代になって再び勉学の道を歩みはじめるのです。妻子を抱えての四十ならぬ三十の手習いには、いろいろと不安もあったでしょう。だが一方では、大いに気負いもあった。そのような時期の句なのです。

私はこの句を読むと、そうした勉学と生活の狭間はざまにあった楸邨の、いいようなない孤独感を

感じます。その奥に不安の気持がうかがわれる。しかし同時に、なんともいえぬアクティブな気分、積極的にこれからだという意欲も感じられて、それが朝焼けの華やきがすぐ消えてしまったという、残心というか、その心の奥に力を感じるので。残心がただ残心だけの詠歎に終わっていない。

そのへんのよさ——孤独、不安、そしてなにかアクティブな気持、気負いというか、意気込みというか、そういうものがみんな融けあった心意をこの句に感じて、私の好きな句でした。それが、戦い終わった翌日の朝に、数年の記憶の底から下敷きとなって、「朝焼けるき日になりき」という句が出てきた。そのことをおもうと、自分のそのときの心の揺れ、内面の動きがたいへん似ていたようにおもいます。

楸邨は句集『寒雷』の後記にも書いているように、自分は教えることに真の生き方を求めようとしていた、教育ということに全力をかけようとしていたのだが、ここで自分の勉強という道に入るのだ、という決断を示しています。そして先ほど述べたような不安とアクティブの心境の中にいる——それがトラック島で終戦を迎えたときの私の心の動きにつながってくるのです。

ここで、戦争についての当時の私の考えを述べておきますと、私は日本もアメリカもどちらも帝国主義戦争だとおもっていました。けれども同時に、この戦争でもし日本が負ければ民族

の壊滅になりかねない。その意味ではこの戦争は民族防衛戦争という一面を持っている——そのように理解していました。そしていよいよ兵隊に駆り出されたとなれば、民族防衛という面に賭けて戦争の成否を見出してゆくしかないという気持でした。その点では、戦争というものに対して半ば肯定的に体を張っていた。それがここへきて負けてしまった。その時になって激しい孤独感に襲われたのです。

まわりには二百人ばかりの仲間がいたのですが、そのなかにおいて自分はたったひとりだという感じになって、天井からぶら下げておいたバナナがちょうど熟^うれてきたのを一房ちぎってむしゃむしゃ食べながら、ベッドの下に飼っていたマスコットの大きなトカゲをながめたり、そんな状態でぼーっとベッドに腰かけていました。

当時、たくさんの栄養失調者、餓死者が出ていて、主計科としての私は、若かったせいもあって、よけい責任を感じている。そういう人たち、亡くなった人たちに対するむくい方ということなども考えていました。ここまできたら、それをはっきりさせなければいかんと気負う気持と、なにかこれから積極的にやらなければ——という「屋上に見し朝焼のながからず」と似たような心境にあったのです。

ただ私の句は楸邨の句にくらべると、もっと回顧的です。毎日毎日椰子の丘に朝焼けがひろがっていた、その強い赤の色が印象に残っている毎日であったなあ、と心境を謳^{うた}っている。楸

邨の場合は「ながからず」と心を残しながら、しかし一步踏み出そうとする積極性を示していました。

このことは私にとってたいへん懐しいおもい事です。そして夜になると、「かの星をかくせしまま」といった、敗戦で目標を失った喪失感がにわかに昂^{たか}まってくる。そして翌朝になると、勢いのいい積乱雲に託して、いまは生き死にを言わず生きてゆかなければならない、生きることが大事だ、死者にむくいるためにも生きぬかなければならない、という考えになる。このように考え方が揺れている。基本は楸邨句に立つ「椰子の丘」なのですが、そのときどきのポイントとなる考えがだいぶ揺れている。それが、このようなささやかな表現の中でもよくわかります。

私がトラック島にいた一年半の間、俳句との関わりをほとんど持ちませんでした。ところがここにきて、にわかに激しく楸邨のことをおもいだしたのです。そして、さてこれから生き死にを言わず、日本に帰っても、たぶん俳句も作りつづけるだろう。業俳（プロの俳人）になる気はまったくなかったが、少なくとも日常記録としても、あるいは偶然の所産としても俳句は作りつづけるだろう。そのとき、いったい自分の師としてだれがいいのだろうか。

私には、学生のころから親しんできた俳人が三人いました。ひとり、学生たちの俳句同人誌『成層圏』の世話焼きをしてくれた九大の学生竹下竜骨の母、竹下しづの女。この人は『ホ

トトギス』の有力な同人で、たいへん男まさりの句を作りました。私はこのしづの女の句が好きでした。それと中村草田男、加藤楸邨の三人です。

日本に帰って、この三人のいずれのところで勉強しようかと、そのとき考えました。

楸邨と草田男と

私は、それまでに発表されていた楸邨と草田男の句集、その自序やあとがきなどをおもいだして、それを噛みしめるうちに、やはり自分は楸邨を師としよう、そして句の目標を草田男に置こうという考え方に、しだいにかたまってゆきました。

どのような理由でそう考えたのか。このことが私の「戦後俳句史」の実質的な始まりになるのです。

楸邨の主宰する『寒雷』が創刊されたのが昭和十五年十月、その後間もなく私は、この雑誌に投句を始めています。

楸邨は、ものの考え方にたいへん一本気なところがあります。彼は第三句集『穂高』の自序に、

「人間を生かし、自然を生かすことは、自然自身の生き方で生かし、人間自身のあり方で生

かさなくてはならぬ、小主観で左右しがたい厳たるものの前に立たねばならぬ。それが最も正しい人間の俳句である」

と書いています。

この「自然を生かす」という考え方は虚子の「花鳥諷詠」に典型的にあらわれているように、俳句を志すものならだれでも持っているものです。けれども、このようにはつきりと「人間自身のある方で生かさなくてはならない」といいきった人は、それまでの私の俳句体験の中には見あたりません。

この、自己に強く執着したい方が私にはたいへん魅力的で、そのような人だからこそ「教えることに真の生き方を求めんとしていた」と断言できるのです。そのような自分なのだ、それがいま方向を転換して自己の勉学に入る一種のためらい、さびしさ——それが私にはよくわかります。

次の第四句集『雪後の天』——昭和十六年の初めに、楸邨は氏の言葉を藉^かりると「衝迫のまま」に隠岐へ旅しています。そして百九十余句の有名な「隠岐紀行」を作っています。この年の十二月、太平洋戦争突入を迎える。そうしたきわめてダイナミックな時間の中でこの『雪後の天』が生まれているのです。その点でこれはたいへん問題になる句集です。

「その冬大東亜戦争の勃発に際会して」楸邨は、自序の中で、

『「実ありて悲しびをそふる」という御言葉が、新たなかがやきを以て胸に生きた。日本人としてこの秋に遭遇した命運の重さと、それを俳句に表出しようとしてとめうる命運の重さを深く思いつつ作句した』

と記しています。「実ありて悲しびをそふる」とは芭蕉が引用した後鳥羽院の言葉です。

私はこの部分を二つに分けて重要だと考えます。一つは、楸邨という人が戦争突入という現実に対して、まじめに率直に受けとめているということ、それが「実ありて」です。同時にそれを、なにか手放しで喜べない、そこに「悲しびをそふる」。これはたいへん正直な感想です。しかし彼は現実ともいわず悲しさともいわず、「命運」という。そこに楸邨のひとつの自己偽装というか、カモフラージュがあると私はおもうのです。ほんとうの気持は、とんでもない現実が起こった、なんともいえず悲しいことだとおもっていたことでしょう。しかしそれをはっきりということができないから、「命運の重さ」と表現した。

ただ楸邨という人は、このように漠然と観念的な表現をする人ですから、最後は「運命だ」と処理していたところがあつたかもしれません。それがこの人の弱点にもなっている。はじめは明確にわかっているのだが、しだいしだいに「運命」という漠たる観念的世界に昇華してしまふ。これが当時、楸邨の句は観念的であると批判された理由でもあるでしょう。

ともかく、こうした複雑な要素を『雪後の天』の自序は含んでいるのです。

自分というものを人間自身の生き方で生かしてゆく、小主観で左右しがたい厳たるものの前に立ち向かってゆくという『穂高』の自序にあるような、悪くいえば自己中心的、よくいえば自分に対して厳しい目を向ける生き方、そういう積極性。そのような面がひとつあって、それがあるからこそ、戦争に対しても一応「実ありて悲しびをそふる」と受けとめて、そしてまた、彼のもうひとつの性癖の観念、「命運」というところへ入ってゆくというプロセスをたどっている。

私は自分の句が楸邨の句を下敷きにしていることに気づいてから、自分が内地にいたころ読んだ彼の句集や序文をおもいだしながら（『雪後の天』を読んだのはあとになります）、そのような楸邨を噛みしめていました。

これに対して草田男の場合は、その第一句集の『長子』（昭和十一年）——この句集は当時、三好達治の『春の岬』（昭和十四年）や中野重治の「汽車の罐焚き」（昭和十二年）などとともに、私たち『成層圏』の仲間たちにとって必読の書でした——の跋がたいへん貴重な内容を含んでいて、その中にこういう箇所があります。

「（私は）全体の一部であり、全体的一端であるに過ぎない『自己』を全体の中に位せしめることによって、肇めて自己の自己たる本質も分明となる」

そして、「私は未だ嘗て一度も自意の放恣に沈溺することを為さなかった」——自分の意の